

自主シンポジウム 10

心を表現する幼児画の理論と実践について

企画者・司会者：塩川寿平（静岡県立大学）

話題提供者：小林友子（鳴門市・矢倉乳児保育園）：野々目桂三（日野市・千葉経済大学）

：喜田周一（橋本市・きのくにこどもの村学園）：山田星史（熊本市・光輪保育園）

：富田喜代子（徳島市・徳島市立論田保育所）

指定討論者：山本卓（因島市・美術教育家）：塩川成子（館山市・かにた婦人の村）

企画要旨 保育内容「表現」のうち、「幼児画」については歴史的にも、あるいは、思想的にも様々な方法論があるが、今回は、実践の場にいる者と、研究の場にいる者が一同に会し、それぞれの立場から考えるところの、幼児画の方法論に関する「理論」と「実践」について提供してもらい、討論することにより、今日的な時代の必要とする乳幼児の心を表現する幼児画のありかたを見いだしたい。

討論の意図 心を表現する点に討論の意図がある。また、物の形を描くことが何を意味するかも討論の意図である。さらに精神面を重視する方法と、技術面を重視する方法の真の共通点を見出すこと。

問題点 主に、自由・解放・創造を中心に問題点を出し合う。自由と指示、解放と抑圧、創造と模倣発達段階の無視からくるところの作品重視主義の描き方のあやまり、等々を問題点としてはっきりさせ討論の焦点がぼけないように注意する。

矢倉乳児保育園での1歳児の絵の実践

矢倉乳児保育園 小林友子

私達矢倉乳児保育園では、1歳6カ月頃をメドに、絵の具でなぐり描きをしている。1枚の四ッ切り画用紙に向かって、思いのまま気の向くまま筆を動かすことから生まれる自由な線やかたまりは、なぐり描きとなって表出されていく。ある時は、新聞紙に描いたり窓ガラスをキャンパスにして描いたり、テラスのすべり台に描いたり、水遊び泥んこ遊びと同じように絵の具筆を使って自由に遊んでいる。自然に自分の思いのまま描く世界に入り込む子どもの姿を見てみると、静かな自己の内面の世界へ入っているように見られる。手の動きが無意識の心の動きと重なるように、自由な表出の世界を散歩し始める。不安でとまったり、スピードが出て楽しく繰り返したり、冒険があって横道にそれたり、道草したり、まるで子どもの心の散歩のようだ。子どもが1枚の絵を描いた後は、大きな肩の息をするように、ホッと我に帰っている。私達保育職員は、子どものその日の活動、行動、生活と照らし合わ

せて、カンファレンスしている。絵の具の絵に入る時の取り組み方と、生活の中で現れている姿がよく一致していることを発見する。

1枚の子どもの絵は、子どもの心のメッセージであることがわかり、保育者自身の子どもののかかわりを考えるいいチャンスだと思う。

子どもは先天的に逞しく生きる力を持っている

きのくに子どもの村学園 喜田周一

子どもは生まれながら先天的に、素晴らしい感性を身にそなえ、逞しい生きる力を持っている。それを私達は、保育だの、教育だのと、大人の都合の良いように仕向け、個性がないの、自由さが欲しいの、もっと創造的に育てたいなどという。それは子ども達にあまりにも傲慢無礼ではないか。「模倣は創造の始まりである」等と声を大にして論議する世情なのだろうか。人間学として原点にもどって、乳児期から子ども達に学ぶべきである。まだ言語の充分にできていない0歳時、1歳児の表出する絵を見て、どこからこの素晴らしい意欲が湧いてくるのだろうか、あの小さな心の中から、噴出するに違いない。2歳児にもなれば個性的で、芸術性豊かな表出表現が盛んになってくる。3歳児第一期の反抗期には、爆発的に総てが盛んになり、周りの大人達を狼狽させる。何かしようと、あの手この手で「三つ子のタマシイ百まで」と教え込み、萎縮させ、いい子だ、良い子だと、主体性を抑圧して、依存心の強い子に育て、その上で、今さら解放だの、創造だのは何事であろうか。模倣から入った概念は、成長と共にどんな手だてをしても、抜けるとは思えない創造とは、その子どもが、五感を通して真剣に生きることだと信じる。

子どもが絵を描くということについて

徳島市立論田保育所 富田喜代子

子どもは、いつもイメージを楽しんでいる。夢を追いかけている。創造する力を内包している。そして遊びの中で、表現するとかしないとかにかかわらず、いろいろな場面で、子ども自らが巻き起こす感情の動き